

ブダペスト通信

盛田 常夫



2025年 NO. 4

2025年テニス全豪オープン観戦記

2025年全豪オープンテニスは男子が予想通りスィナー、女子は意外にもキーズが勝利した。スィナーは昨年全豪で初めて4大タイトルを獲得してから、これが3つ目のタイトルになる。男子テニスの世界で一步頭を抜け出した。

それにしてもズヴェレフ選手にとって、四大タイトルは遠い。ビッグスリーを打ち負かす次世代のリーダーと目されていたが、肝心の四大タイトルが遠い。ぐずぐずしているうちに、次の世代が台頭してきてしまった。

それにしても、ズヴェレフ世代のツイツイパスは1回戦敗退、メドヴェージェフは2回戦敗退である。ツイツイパスは20歳のミケルソンに、メドヴェージェフは19歳のティエンに敗れた。すでにこの世代は若い世代の突き上げに苦しんでいる。

2025年1月26日

キーズは念願のタイトル

大坂が四大タイトルを取る前まで、キーズは次世代の女子テニスを背負う選手になると目されていた。大坂より、はるかに将来を嘱望された選手だった。2015年の全豪オープンセミアイナリスト、2017年の全米では決勝でスティーヴンスに敗れて準優勝、2018年の全仏・全米セミアイナリストと活躍したが、怪我也あって、四大タイトルには届かなかった。ここ数年はプロになった当初の勢いがなく、すでに終わった選手として見られていたが、第19シード29歳で迎えた今大会で、初めての四大タイトルを取った。嬉しい勝利である。

キーズは準決勝、決勝で世界2位と1位を撃破しても優勝だから、文句のつけようがない。彼女は大坂と同様に、パワーのある選手で、今大会ではフォア、バックともに、速いフラットな打球の精度が良かった。スピン系の打球が多くなった現在のテニス界で、フラット系やスライス系の打球を武器とする数少ない選手の一人である。逆に言えば、この打法で強いボールを打てる選手は、相手を困らせる。弾まないボールをパワーで打ち返すのが難しいからだ。

シフォンテックはキーズ戦前まで5試合を戦ってわずか7ゲームしか失わず、圧倒的な勝利を重ねてタイトルを取る勢いだった。ところが、対キーズ戦で実に18ゲームも失って準決勝敗退となった。シフォンテックが手こずったのは、慣れないフラット系の強いボールである。シフォンテックは高く弾むボールを打ち返す技術に優れているが、フラット系の速いボールに苦戦する。昨年の全仏オープン2回戦で大坂に敗戦の崖っぷちまで追い込まれたのも、同じ理由である。

キーズの躍進の要因に、結婚して精神的に安定したことがある。ややムラのあるストロークが安定したことが、最大の勝利要因だった。キーズよりも若い大坂はキーズの勝利から学ぶべきものがある。精神的に安定し、パワーのあるストロークが安定すれば、まだまだチャンスがある。

ますます自信を付けたスイナー

スイナーは昨年の全豪決勝で、2セットダウンから逆転優勝したことが大きな経験になった。以後、ここ1年間、ほとんど敵なしの状況である。セットを落とすことはあっても、慌てずに堅実に勝利する。王者の貫禄が付いてきた。アルカラスが度々故障に見舞われるのにたいし、スイナーは大きな怪我に見舞われていない。故

障が少ないことは重要なファクターである。イタリアを代表するスキー選手として期待されたが、テニスを選んだことは正解だった。スキーで鍛えたバランス感覚が、足腰の強さを支えている。

準決勝で故障棄権したが、ジョコヴィッチは未だ衰えを知らない。ジョコヴィッチのフィジカルの強さは驚異的である。それでも、準々決勝でアルカラス、準決勝でズヴェレフと戦うドロウはきつい。たとえ、ズヴェレフを破っていたとしても、スィナーには勝てなかつただろう。連日、3時間4時間のゲームを闘い、最後にスィナーと当たるドロウは厳しい。錦織世代、ズヴェレフ・メドヴェージェヴ・ツイッパス世代を一蹴し、一回り以上も若い世代と対等に戦える力は驚異的である。それでも、今年38歳になるジョコヴィッチが、連日、勢いのある若い選手と激突するのはきついだろう。

若い選手が台頭

結局のところ、ビッグスリーに代わって次世代のテニス界を担うのが、錦織世代、ズヴェレフ世代を通り越して、15歳も年下の若手世代になった。5年を1世代と計算すると、ビッグスリーにとって代わるまで3世代を要したことになる。それほどビッグスリーの存在は偉大だった。ようやく、世界のテニス界がビッグスリーの時代から、スィナー、アルカラスの時代へと移りつつある。

今年の全豪を見ていると、10代から20代初めの選手の活躍が目覚ましい。スィナーとアルカラスに続く若い選手たちに目を配らなければならない。世界では次から次へと次代の天才たちが台頭してくる。

2回戦でアルカラスと対戦した西岡は、第1セット4ポイントしか取れず、わずか18分でセットを失った。第2セットも1-6で取られて、手も足も出ない完敗である。もう少し相手に立ち向かう姿勢を見せないと、観客に失礼だ。体が小さく、もう若くはない西岡に多くを期待するのは無理だが、もう少し戦う姿勢を見せてもらいたかった。

錦織のストロークは今でも一級品だが、如何せんパワーが不足している。サーブイゲームを簡単に取れないから、ストロークラリーが続き、自然と試合が長くなる。2セット先取の大会なら何とか体はもつが、グランドスラム大会ではもう体がもたない。3セット先取の4大トーナメントで緒戦から4時間の試合をしては2試

合を消化するのが精いっぱいだろう。現在でも ATP ランク 30 位前後の力はあるが、4 大会での活躍は期待できないし、30 位以上のランクアップも期待できない。

錦織と西岡はもうピークを過ぎた選手だが、日本男子の若い選手が伸び悩んでいる。2019 年ウィンブルドンジュニア優勝の望月慎太郎、2024 年全豪ジュニア優勝の坂本怜の活躍が期待されたのだが、ともに今大会は予選 1 回戦で簡単に負けてしまった。彼らに共通しているのは、フィジカルが弱く、体力がないことだ。まるでやしのような体格である。

望月はラケットにボールを当てる感覚は優れているが、圧倒的にパワー不足である。今のままでは、4 大会の本選に出ることすら難しい。坂本は 190cm を超える身長があり、サーブも強いが、まだまだ少年の体のままである。猫背気味に、べた足でサーブに向かう姿勢はいただけない。いまだに ATP300 番台をうろうろして、チャレンジャーを回っているようでは、同世代の選手との差は開くばかりである。ジュニアのタイトルがなくても、坂本選手と同世代の選手が、本選でシード選手と対等に戦っている。この違いはいったい何なのだろうか。とくに男子はフィジカル強化に取り組まないと、世界から取り残されるばかりである。

ティエンに苦戦したメドヴェージェフ

本大会で、予選上がりの 10 代選手（チェコやブラジルの選手）が、トップシード選手と互角に戦っている。その一人であるティエン（アメリカ、19 歳）は、2 回戦で第 5 シードのメドヴェージェフと 5 時間近く戦い、勝利した。身長は 180cm と大きくないが、5 時間近く戦っても、ストロークが乱れない。パワーがある選手ではないので、ハードコートでの活躍は限界があると思われるが、最後まで左右に深いボールを返し、スライスとドライブを使い分けながら、メドヴェージェフを自滅に追い込んだ。赤土のコートでさらに活躍する可能性を秘めている。

精確で速いスライスを多用され、パワーテニスのメドヴェージェフは根気が続かなかった。打っても打ってもボールが返ってくると、体力だけでなく、精神的にも疲れる。ただでさえ短気な性格のメドヴェージェフには最高の戦術だった。

メドヴェージェフとティエンとの 5 時間マッチが終わったのが午前 3 時。そこから 24 時間を経過して、ティエンは 3 回戦に向かいムーティをストレートで破っている。その体力は称賛される。望月や坂本にはこのタフさが欠けている。日本ではフ

フォームの矯正に時間を使いすぎて、パワーを付けるトレーニングが不足している。坂本などは、後 10kg は増量しなければならない。ウェイトトレーニングに精を出してほしい。

錦織はスイナーとアルカラスは別格と言っているが、それに続く選手たちは物おじせずに、果敢にこの二人に挑戦している。この二人が一步抜け出ていることは間違いないが、それに続く若い選手たちからも目を離せない。

大坂なおみの現在

ガルシアとの 1 回戦はイライラが募る試合だった。ストロークミスが多く、決めきれない。サーブはスピードを抑えたコントロール重視で、これでは大坂の強みはまったく発揮されない。緩いサーブで、ストロークミスが多ければ、怖さはまったくくない。それでも要所で相手のミスを突き、試合に勝利したが、ストレスが多いゲームだった。

この状態で、2 回戦の相手であるムホヴァには対抗できないと思った。ムホヴァは大坂がもっとも苦手とするオールラウンドプレーヤーである。パワー一本やりの大坂とまったく正反対のテニスをする。サーブ力もあり、ヴォレー、スライス、ドライブを駆使するムホヴァには勝てないだろうと思っていた。

事実、第 1 セットは簡単に失ってしまった。これまでかと思ったが、そこから、大坂のパワーが爆発し、試合を逆転したのには驚いた。テニスの技術的進歩はまったくみられないが、以前のようなパワーで相手を圧倒するテニスを展開し始めた。その強気の姿勢とストロークの正確性が、ムホヴァを打ち破った。このテニスは全豪でタイトルを取った時のテニスである。3 回戦も期待されたが、1 セットを終えたところで、途中棄権となった。もう少し、大坂の試合を見てみたかった。

それにしても、気になるのは大坂のテニスに技術の向上が見られないことだ。大坂はスライスを打つことはないし、難しいボールにたいし、ラケットの角度だけで当てて返す技術もない。ネット近くの球ですら、ラケットに乗せて落とす術がなく、すべてドライブ一本やりである。コーチがスライスやヴォレーの練習をさせないのかと思ってしまう。多分、本人がやりたくないからだと思われるが、いかに不器用とはいえ、男子のスイナーやアルカラスでさえ、繋ぎの球としてスライスを使う。剛球サーヴァーのシェルトンですら、バックハンドはスライスとドライブを打ち分

けている。スライスがないと、相手の攻撃を交すことができない。それはサーブレスリーヴについても言える。現在では大坂並みの速いサーブを打つ選手が続出している。大阪はすべてボールをドライブで返球し、ブロックレスリーヴを使うことはない。これでは速いサーブに振り遅れるし、正確に返球できない。あのサバレンカですら、スライスを使うことができるし、ブロックレスリーヴも使う。

スライスの練習を拒否しているのかどうかは知らないが、コントロールショットを心掛けているなら、もっとプレーの幅を広げないと、4大大会で上位を狙うのは難しい。どのようなコーチングを受けているのか不思議である。

期待される日本の若手女子選手

日本女子の内島萌夏（もゆか）は身長（173cm）があり、ラケットを振り切るパワーがある。本選 2 回戦で将来を嘱望されているロシアのアンドレーヴァ（世界ランク 21 位、17 歳）と互角以上の戦いを見せたが、最後のタイブレークで惜しくも敗退した。ジュニアで優勝した園部八総（わかな）も 170cm の身長がある 17 歳のホープである。今後の活躍が期待される。

男子も女子も、日本は小柄な選手が多い。現在のテニス界でパワーのないテニスに、世界で戦うチャンスはない。大坂が世界のトップに立った頃は、まだ剛球サーヴァーは少なかった。しかし、今はほとんどのトッププレーヤーが 170-180km/h のサーブを打つ。緩いファーストサーブやセカンドサーブは叩かれる。内島選手や園部選手は現在でも 170km/h のサーブを打つ力がある。これをもっとパワーアップすることだ。そうすれば、トップ 30 が見えてくる。

日本の男子選手でも速いサーブを打つ選手はいるが、ランキング上位の錦織・西岡選手のサーブスピードは、ほぼ女子のトップ選手並みか、それ以下である。これで現在の男子テニスの世界で戦うのは無理だ。日本のテニス界はもっとフィジカル強化へと舵を切らないと、世界から取り残されるだろう。